

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

A. コースワークの充実・強化

④社会人、留学生、他分野・他大学からの多様な大学院生に対応した基礎学力補完教育の実施やカリキュラムの提供

④社会人、留学生、他分野・他大学からの多様な大学院生に対応した基礎学力補完教育の実施やカリキュラムの提供

《人社系》

●関西学院大学社会学研究科社会学専攻

「社会の幸福に資するソーシャルリサーチ教育」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

近年の傾向として学部時代にさまざまな学問分野を学んだ学生が社会学研究科に進学していることが指摘できる。とりわけ留学生の場合には、英語能力の点において各人の能力に大きなばらつきが見て取れる。本研究科のカリキュラムでは英語での文献講読科目を必修にしているため、その点に鑑み主として留学生を対象とした外国語（英語）の授業提供の改善を試みた。その過程において、担当教員の確保、ならびに学生個人の習熟度を踏まえたうえでの授業内容の策定等は容易ではなかった。

(苦労したこと、困難であったこと、具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

留学生の場合、その出身地ならびに教育を受けた時期によって現在保持している英語能力が一律ではない。そのため、各人の英語読解能力等を見極めた上で、きめ細かな授業内容の策定ならびに運営の実施が求められる。そのことが、当該科目の改善を進める上での困難の原因であったと判断される。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

英語文献講読クラスを二クラスに分割して開講し、その一方を主として留学生を対象としたクラスとして運営した。その結果、受講生の能力とニーズに対応した科目提供を実現できた。受講生による授業評価からも、その教育的効果はきわめて望ましいものであったと判断される。(留学生入学者数(前期・後期課程計):平成20年度3名、平成21年度2名、平成22年度2名)

《医療系》

●東京医科歯科大学医歯学総合研究科顎顔面頸部機能再建学系専攻

「歯科医学における基礎・臨床ボーダレス教育」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本プログラムは全大学院生を対象として実施したが、コース授業は原則として日本語で実施しており、留学生にとっては英語の講義に比べて理解しづらい場合があった。また、10月入学の留学生の場合は日程的にコース授業が受講しづらい場合もあった。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

A. コースワークの充実・強化

④ 社会人、留学生、他分野・他大学からの多様な大学院生に対応した基礎学力補完教育の実施やカリキュラムの提供

(苦労したこと、困難であったこと具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

コース授業全てを英語化することは現状では困難であり、コース授業のスライド等は極力英語で作成した。しかし、日本語が不得意な留学生にとっては理解しづらいという意見があった。日程については、コースによって異なる日程となっており、現状では10月入学生に合わせて調整することは困難であり、学生各々のスケジュールに合う講座を履修してもらっている。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

現時点ではコース授業は必修ではなく、他の科目で卒業に必要な単位は取得可能であるため、特に留学生に特化した授業は設けなかった。一方、外国人講師を招聘し、英語によるセミナーを主催することで、日本語を不得意とする留学生に対しても、質の高い講義を提供する場を設けた。

3人指導体制に関しては、留学生に特有のデメリットは特になく、アンケート結果でも好評を得ている。

●新潟大学医歯学総合研究科口腔生命科学専攻

「プロジェクト所属による大学院教育の実質化」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

専攻共通科目として、Professional writing & reading ならびに実践統計学ベーシックコースを新規に開講したが、前者では英語基礎能力が劣る学生の受講による演習進度の遅延、各人の到達度のアンバランスがあり、また後者では受講者のほとんどが日本人であったため、留学生への学修支援が困難であった。また、一部の社会人学生ではこれら新科目の受講が困難であった。

(苦労したこと、困難であったこと具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

Professional writing & reading では英語基礎学力が劣る学生が存在すること、writing を学士課程教育で十分実施されていないことが考えられ、教育内容のレベリングを担保するのが困難であった。留学生への英語による実践統計学ベーシックコースは日本語と英語による複数回開講をせざるを得ず、教員の負担が大であった。社会人学生に対しては同一時限での聴講が難しく、デジタルコンテンツを用いた講義を多用せざるを得なかった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

A. コースワークの充実・強化

④社会人、留学生、他分野・他大学からの多様な大学院生に対応した基礎学力補完教育の実施やカリキュラムの提供

英語に関しては講師の努力により、ある一定のレベルまで英語力の向上が図られたが、一部の学生では必ずしも科目の到達目標最低限に留まるものも認められ、入試における基礎学力の確認の厳格化をせざるを得ないと考えられた。実践統計学ベーシックコースでは教員の負担が大きくなったが、英語での講義をお願いし、留学生教育にあたった。留学生、社会人向けの特別コースの設定、デジタルコンテンツ化の促進などを行う必要がある。